

一般演題

1. Radioimmunoassay法による α -Fetoproteinの臨床的意義

田中 義淳 難波 経雄 湯本 泰弘
(岡山大学 第1内科)

α -Fetoprotein の2抗体法による Radioimmunoassay が開発され、従来の M. O 法と比較すると約1000倍の感度が得られる。DINABOT 社製 α -Feto-125 を用いて原発性肝癌の早期診断、慢性肝炎や肝硬変症の臨床経過との α -F. P. の推移および肝癌への移行について検討を行なった。対象は肝細胞癌20例、転移性肝癌7例、胆管癌3例、急性肝炎20例、慢性肝炎53例、肝硬変症47例、妊婦9例、正常対象10名その他の疾患62例計231例である。

(結果) 正常対象は 0~10ng/ml, 肝細胞癌20例中17例は 10000ng/ml 以上で1例は 315ng/ml, 2例は 7~19ng/ml と低値を示した。Mesenterium の Leiomyosarcoma の肝転移例は 10000 以上を、肺癌、胃癌の肝転移各例は比較的高値を示した。胆管癌および他の原発性悪性腫瘍は正常域にあった。肝癌以外では急性肝炎、慢性肝炎特に亜小葉性肝壊死を伴う例、肝硬変症特に A¹ 型および妊婦例に比較的高値を示すものが多くみられたが臨床経過中における一時的な増加であった。

質問： 岩崎 一郎(岡大 第2内科)
 α -Fetoprotein 値と LDH 活性値および LDH Isozyme Pattern との関係は如何。

答： 田中 義淳(岡大 第1内科)
LDH, ICDH との関係は統計上の上からは、はっきりと関連づけることはむづかしい。

*

2. α -Fetoprotein の Radioimmunoassay

長谷川 真 吉岡 溥夫 岩崎 一郎
(岡山大学 第2内科)

α -Fetoprotein の2抗体法による Radioimmunoassay 法が開発されているが、Dainabot 製 α -Feto-125 Kit を用いて原法ならびに反応時間を短縮した方法について検討した。

37°C で第1, 第2反応時間を各10時間とすると 4°C

で各24時間とする原法よりもさらに sharp な曲線がえられ、感度が良好となる。第2反応を 37°C 2時間、また、第1反応を 2~4時間と短縮しても原法と殆んど変わらない曲線が得られる。従って原法よりも 37°C 各10時間法の方がより感度がよく、第1反応を 2~4時間、第2反応を 2時間としても測定可能である。

次に各種疾患の成績については、原発性肝癌9例中8例は 320m μ g/ml 以上の強陽性でもあり、1例は陰性、転移性肝癌では胃癌肝転移で高度黄疸を呈した1例が 26m μ g/ml で他の7例は陰性、他臓器癌15例、白血病5例、悪性リンパ腫3例は陰性、慢性肝炎8例中2例、肝硬変11例中1例は陽性、妊婦2例とも陽性。

質問： 難波 経雄(岡山大学 第1内科)

incubation の温度を上げ、時間を短縮すれば、少しの時間の差でも反応に影響があると思われませんが、100~200 検体を一度に測る場合、個々の検体間の時間のずれによる反応の違いが起らないでしょうか。

*

3. 各種肝疾患および妊婦血清における α -Fetoprotein の Radioimmunoassay について

川上 広育 国政 徹明 丸橋 暉
相光 沙美 中村 正義 三好 秋馬
(広島大学 第1内科)

原発性肝癌の血中には α -Fetoprotein が特異的に出現し、この蛋白を証明することはその診断に極めて効果的である。われわれは過去2年間 M. O. 法にて α -Feto. の検出を行ってきたが、原発性肝癌21例中13例(61.9%)が陽性でその検出度は低かった。今度 α -Fet. Radioimmunoassay 法にて広第1内科入院、外来通院患者のうち診断の確定した各種肝疾患患者および妊婦血清についてその検出を行なった。

正常者19例は全て 0~10m μ g/ml, 急性肝炎17例では激症肝炎の1例を除いて 40m μ g/ml 以下、慢性肝炎24例では3例が 40m μ g/ml 以上、21例は 40m μ g/ml 以下であった。肝硬変症25例では6例が 40m μ g/ml 以上、19例は 40m μ g/ml 以下であった。原発性肝癌21例は17例(80.9%)は高値を示し、4例は 40m μ g/ml 以下であった。転移性肝癌4例のうち2例は 200m μ g/ml 以上